

人間学科共通科目「人間学」特別講演

VUCA時代の「問い」と中間集団

開 沼 博

日時：2023年10月25日（水）午前9時

会場：創価大学 AB101 教室

ご紹介いただきました開沼と申します。皆さんは大学に入りたての人も多く聞いていますので、大学での学業の参考になればと思い、今日は話をしてみたいと思います。

福島学と中間集団の研究

少々自己紹介をさせていただきます。震災・復興関係のこと、福島第一原発の廃炉の問題、処理水の問題、最近の報道をご記憶の人もいるかもしれませんが、そういったことを専門の一つとしてやってまいりました。今日はいちおうちょっと幅広いテーマから始めて、外からそこにアプローチしていければというふうに思っています。

もともと社会学が専門ですが、同時に専門は福島学だとも称しています。なぜ社会学のままではダメなのかというと、いろんな学問の領域を越えて考えなければならない問題が福島にはたくさんあるからです。これを学際領域と言います。国同士の領域を越えるのを国際的と言うように、いろんな学問同士を越えていくのが学際領域です。まさに、福島の問題はそうでなければ

(2)

ならないのです。例えば、原子力や放射線についての知識もなければならぬ。一方で、地域コミュニティや中間集団について考える社会科学の知識も必要です。地域経済やそれを支える行政・法律の知識も必要という意味で福島学は学際的なのです。

中間集団とはどういう集団のことかという、例えば、地域の自治組織です。また、学校の同窓会のようなものも中間集団です。日本でも海外でもそうですが宗教団体のつながりも中間集団です。今、中間集団がどんどん壊れている、だからコミュニティが大事ということが言われたりします。今、都会に住んでみると隣に誰が住んでいるのかよく分からない。昔の地方ならそんなことはなく、ここに隣の人が何年前から住んでいてどういう家族構成なのかよく分かっていました。今は中間集団というのがなくなって、色々な人のつながり、顔が見える関係がなくなってきている。それは、悪いことばかりではなく、ある面では私たちが望んだことでもあります。バラバラに一人一人が生きたいように生きる、個人主義ですね。例えば農村なら、「お前は長男だから家を継げ」というようなしがらみがあったり、ジェンダー的に「男だからこうあるべきだ」、「女だからこうあるべきだ」みたいなしがらみがあった。今はそういうものから自由になれる、個人主義というのはそういう側面があります。一方で、バラバラの個人で生きることがすなわち幸せなのか、あるいは、人間としてあるべきなのかというふう考えた時に、何か困ったときに助けてもらう、あるいは、助ける、相互扶助というもの、何らかの繋がり、コミュニティ・共同体があるから、担保されていたわけです。皆さんは若いので悩みがあっても自分ひとりで乗り越えていけるという感覚があるかもしれません。しかし、どれだけ自分の能力を発揮しようとしても、考え抜いても、乗り越えられない問題にいずれぶつかっていく瞬間というのがある。そういう時に、ひとりではダメだけれども、みんなで励まし合って乗り越えていけるようなこともあるかもしれません。だから、バラバラの個人で生きる個人主義が、少なくとも現状はそういう状況が加速しているわけですが、それでいいのかということ必ずしもそうではなかったりす

るわけです。この中間集団という言葉をまずご理解いただきたいと思います。

中間集団はどんどん崩れ去っていています。そういうなかで災害があったりコロナがあったり、海外では戦争が起きたりしています。そうすると、例えば戦争が今明確に起こっているけれども、戦争が起こる前からフェイクニュース（ディスインフォメーション、デマ）がネット上には流れていて、戦争を起こすことに駆り立てられるような人たちが出てきていたりもします。その時に、普段からいろんな人と相談し合えるような関係や情報を交換し合える関係があれば、簡単にはフェイクニュースには騙されないのです。中間集団が壊れていくとバラバラの個人が増えるわけです。バラバラの個人が、コロナでいろいろ不安だという時に、非科学的なインターネット上の情報に騙されて、然るべき対応を取らないで亡くなってしまう、というようなことも既に起こっています。このようななかで、どのように中間集団を再構築していくのかということは重要だと思っています。

2011年3月11日に、東日本大震災と福島第一原発事故があってあらわになった課題がありました。そして今もいろんな課題が残っています。その課題を発見して、そこにいろいろな対話の機会を作っていく、「楽しいな」「美味しいな」というようなことをきっかけにして中間集団のようなものを作り直したり、あるいは、いろんなことを学び、教育する機会を作ったりということをやっています。これが私の一つの研究のアプローチです。自己紹介を兼ねて、あるいは今日のテーマにもつながるということでお話をしました。

東日本大震災・原子力災害伝承館というのが福島県の上野原町にあります。行ったことがある人はあまりいないかもしれませんが。ただ、ここ3年くらい、全国から修学旅行生や学校からの見学が増えてきています。ここの上級研究員という肩書きで、非常勤ですが、月に3～4回働いています。いろんなところでイベントを作ったり、高校生と一緒に研究をしたり、大学生・大学院生を研究者に育てたり、そういったこともやっています。

(4)

新しい貧困化：擬似包摂社会

3.11に関係ない話も含む現代社会の諸問題についてフィールドワークをしながら、いろんな事実を集めていくというようなことをしています。

その一つとして、10年前に『漂白される社会』（ダイヤモンド社、2013年）という本を書きました。貧困の問題やグローバル化などを扱っています。最近の事例だと、「トー横キッズ」というのがあります。トー横というのは新宿の歌舞伎町という町で、皆さんの世代からもっと若い中学生、中には小学生くらいまで含めて、ある種ホームレスのようになりながら、お酒を飲んだりオーバードーズ（薬の過剰摂取）をしたりして社会問題になっています。それを10年以上前から、現場にいる人たちに話を聞いたり、なぜそういうことが起きているかを探究したりしてきました。

社会学者はしばしば現代社会を理論化する作業をしますが、そのなかに「擬似包摂社会」という言葉があります。イギリスの社会学者ジョック・ヤングが使っている言葉です。「包摂」というのは、「仲間に入っていいよ」ということです。対義語の「排除」は、「この仕組みの中に入っちゃダメだよ」というものです。今イスラエル、パレスチナで起きていることは、ある面でいろいろな排除で、「弱い人は助けられません」、「おまえ国境のあっちに行け」などといったことが起きている。これは、生々しい分かりやすい排除ですが、これは、いろんなレベルで起こります。

教育においてもそうです。お金がないから進学できないという人もいます。皆さんの親世代、ましてやおじいちゃんおばあちゃんの世代だと、どれだけ勉強を頑張りたいと思っていても大学に行けなかったという人たちもいたりします。そういった人たちをどのように包摂し直していくのか。創価大学だと通信教育がそういう役割を果たしています。自分が子供の時は中卒、高卒で働かなければならなかった、けれどもいつか勉強して自分の仕事に生かしたいし人間関係も豊かにしたい、そもそも人間とはどう生きるべきなのか根本的なことについて考えたいという時に、ある程度お金も貯まったし子育て

なども落ち着いてきて、地域のことを見守る立場になったという人が、ずっとやりたかった勉強をやるうということ、通信制の大学に入って通信教育を受けているという方にお話を聞きました。これは、排除された方たちを包摂に戻していくという話です。

雇用でもそうです。分かりやすい例として、外国人の方たちはなかなか日本で働けない、ビザの問題、制度的な問題もあります。そこにストッパーがかかるのは単純な差別もあるけれども、一方で、日本の若者の雇用あるいは高齢の方も働かないと生活維持ができないという状況もあるなかで、いきなり外国の方たちにどんどん労働者に入ってもらわねにもいけないという論理もあります。そうした雇用市場から排除されてしまった人のなかで頑張りたいという人にもう一度入ってもらう、包摂していくことも大事です。

今、包摂と排除の話をしてはみたけれども、「擬似包摂社会」とは何なのかを少しだけイメージしていただきたいです。社会学者ヤングは、今の社会は擬似包摂になっていると言うのです。その一例が「ホームレスギャル」です。私が生まれた約40年前、我が家は人口30万人規模の地方都市に住んでいました。当時、駅の周りにまだホームレスの方がダンボールで家を作ったり、川の橋の下に小屋を建てたりしていましたが、だんだんいなくなっていきました。では、ホームレスの方がいないのかというと、そんなことはないのです。私が上京したのがちょうど20年前の2003年です。皆さんが生まれた頃でしょう。90年代まで、新宿の西口に屋根のある通路があるのですが、ホームレスの方たちがそこにいました。路上や公園にもいました。ですが、一斉に消えました。消えさせられました。そういう方達が入る施設があり、そういうところに移って下さいと言われてた人もいました。生活環境としては悪くありません。屋根があつて食事も出ます。しかし、ホームレスの方たちに実際にお話を聞いてみると、そこは生活を管理されてしまうので不自由になるということです。いろんな役所の手続きなどに巻き込まれてしまうし、あなたは誰でもう一回働く気があるのかということやをずっと問われます。そういうことが辛いので、もう一回ホームレスに戻る方も結構いたりします。

(6)

では、そういう人たちがどこにいるのかというと、いろいろ見えにくいところ、追い出されないところにまわっていきます。なかには、電車の入場料だけ払って、ずっと山手線のなかをぐるぐる昼間は回っていて、夜になったら出てきてゴミをあさるといったことをやっている方たちもいました。しかし、今の東京にはそういう風景はなかなか見ないと思います。では、どこにいったのかというと、形を変えて存在するのです。

今言ってきた話は中高年男性のイメージだと思いますし、実際そうでした。労働市場という点ではまだ力仕事が高中年男性だったらできるけれども、女性、ましてや若い女性になると、そういうこともしにくい。じゃあどうやってお金を稼いで生きているのかを見ていった時に、その一つの事例が「ホームレスギャル」だということで、フィールドワークをして文を書きました。

一見見た目は普通に綺麗で、ブランドバッグを持って、スマホも持っていたりします。にもかかわらずホームレスというのは、非常に矛盾したようにも見えます。しかし、よくよく考えてみると、ブランドバッグというのは、一回買えばかなり丈夫で壊れにくくて、もちろん汚くも見えないです。スマホは、それを持って友人と連絡を取り合ったり、いろんな仕事の融通をし合ったりできる。いわゆる「パパ活」のような仕事です。そういったことをしたりしながら、家は無いけれども、喫茶店とかを転々としている、そういう人たちがいるという話をしました。ここで、「擬似包摂社会」とは何かという話を、今の事例から説明していきます。一見、社会のなかに排除している人がいないように見えます。どんどん社会が優しくなっているように、そして、綺麗に便利になっているように見える。けれども、見えないところで排除されている、本来であれば排除されていた、それが見えていたはずの人たちが、見えないところに追いやられている、社会のシステムのなかで不可視化されている。これが、「擬似包摂社会」です。

ヤングの説明をするときに、別のたとえ話もします。例えばサッカーの試合でスタジアムに集まる人たちは、みんなどちらかのチームのユニフォームを着て、応援します。「楽しかったね」と言って、その瞬間は一つの空間に、

同じ〇〇ファンとして包摂されるわけです。ただし、その試合が終わった後にどうなるのかというと、ある人はそのままタクシーに乗って都心の1億や2億円するようなタワーマンションに帰るかもしれない。一方で、ある人はそこから電車やバスを乗り継いで、それが悪いという話ではないですが、2時間くらいかけて5万円程度のワンルームに帰って、カップラーメンを食べて、ストロング系の安いアルコール飲料を飲んでいたりもするかもしれない。これもまた、一つの「擬似包摂社会」の分かりやすい例です。

一見、そこに明確な貧富の格差や階層、ただお金の有る無しだけではなく、その子供にどういうふうに通学を受けさせていくのか、人間関係が豊かかストレスがあるのか、もっと別の趣味・熱中できることがあるのか、人に何か助けてあげられる、あるいは助けてもらえるような余裕があるのか、そういう線引きが本当は明確に残酷にされているのだけれども、見えなくなっているという話です。これが新しい貧困化、擬似包摂社会ということです。

激安のシェアハウスのようなものができたりする。昔だったらこのエリアもそうですけども、人口がバーンと増えている時に郊外にニュータウンを作ろう、大学を作ろう、いろんな文化施設を作ろうとなりました。今人口が減っているなかでそういったものも構造が大きく変わってきています。学生の皆さんは若者ですけども、昔は若者と言ったら、例えば、「青年の主張」という番組が昔NHKでやっていました。「青年会議所」という全国規模の団体もありますが、大体これは40歳ぐらいまでには青年を終えろよという年齢制限があったわけです。昔は「若者」は限りなく10代に近かった、そして20代半ばくらいからは若者と言いくなくなり、長くても30代のうちに若者は終わっていく。ところが今は若者文化の担い手は30代、40代になっても違和感を覚えなくなってきました。何を言いたいかというと、若者期が長期化しているのです。つまりある面では未熟であるから見習い期間が長くならざるを得ないということかもしれない。いろいろな余裕が出ないままにずっとその時間を耐え忍ばなければならない。収入面でもそうです。余裕が出て、昔だったらマイホーム幻想があって、家を買って結婚して一人前のよ

(8)

うな言い方もあったけれども、そうじゃない生き方を別に選べる自由が出たとも言えるし、でもそういう生き方を選べるほど金銭的な余裕、時間的な余裕、人間関係の余裕がなくなっているのかもしれない。そういう時期になっています。

『絶望の国の幸福な若者たち』(古市憲寿著、講談社、2011年)という本が十数年前に話題になりました。著者の古市憲寿さんはよくテレビに出ています。私の大学のゼミのほぼ同期です。彼のデビュー作で、出世作でもあるのがこの本です。若者たちを対象にした調査で、「今どうですか、幸せですか」と探ると、昔の若者たちに聞くより明らかに幸せ度は上がってきています。では、「明日に未来に、20年後、30年後に希望が持てますか」と言うと、「そうでもないです」というふうに答えるようになってきている。つまり、未来に絶望しているんです。これを、「絶望の国の幸福な若者たち」という言葉で端的に表しました。分かりますか。将来の絶望ということと、その時幸せであるということは別なんです。なんか連動してそうじゃないですか。希望があれば幸せであるかもしれない。でも、昔は逆でした。皆さんのお父さんお母さんも、40代か50代かでだいぶ違いますが、皆さんの親御さんが50代半ばくらいだといわゆるバブルとかが体験できている世代ですので、もっと未来が良くなるのではないかという感覚を当時の若者は持っていた。でも、その日々は結構大変だった、単純に不便だったわけです。今みたいにスマホもありません。コンビニにいてもいろんな便利なサービスが今ほどはない。インターネットカルチャーもないし、コミュニケーションツールもアナログ。だから、昔は未来がもっと良くなるはずという希望があった。でも今はまだ不幸なんだという感覚があったんです。今、それは逆転しているんです。将来どうなるか分からないし、このままフラットか右肩下がりがなんじゃないかという絶望をしつつも、とはいえ今の満足度は高いなど。暇な時間を潰す娯楽もいっぱいあります。雇用や社会福祉も実際に充実してきています。というなかで、この絶望部分をどういうふうに変えていくのかということが大きな問題になっています。

不景気がもたらす新しい貧困

不景気で経済的循環が回らなくなってきている。世界で国によってもいろいろ違いますけれども、少なくとも日本はそれが非常に明確に出てきています。いわゆる新興国、中国とか東南アジア、あるいは南米とかだと、ここ20年くらいでかなり経済的には活性化してきています。一方で、情報化とかグローバル化というのも起こっているわけです。そして、不安とか不信のアディクション、つまり、中毒的なもの依存症的なもの、アルコール依存症とか、オーバードーズ（薬の過剰摂取）とかが起こっているということです。

第二次世界大戦から1980年代、経済成長期と皆さんが生まれる少し前の1990年代から今に至るまで、何が失われたのかというと、大きな企業とか銀行が潰れたのです。80年代くらいまでは、電車の値段とか米の値段とか、作物やいろんな製品の値段を、国が決めていました。つまり、企業の動きと国が一体となって成長できるように、ある面では競争が過剰に起こらないように、でも大きな団体のなかで効率的に物事を進められるように動いてきたんだけれども、それが保てなくなって大きな証券会社が潰れたりもしました。

終身雇用とか護送船団方式というのも崩れました。会社が一生面倒を見ますよという話だったのが崩れてきて、若いうちから非正規雇用の一年契約で働く人が増えています。大学業界でも同じことが起こっていて、現に大学が潰れ始めていますね。去年のニュースで、女子大のなかではブランド力のあった大学が募集を停止したり、東京工業大学と東京医科歯科大学との合併が持ちあがったりもしました。合併にともなっているいろいろ削っていくという話です。背景はいろいろありますが、これまでのようにずっと安定的に大きな組織、大きなブランドが生きるというわけにはいなくなってきたのです。そのなかで、今見てきたような新しい貧困、明らかに排除されているわけではないけれども、実際のところは結構辛い思いをしている人もいるという状態が生まれてきたのです。

先進国型の貧困というのは、土地の価格がどんどん上がり、人材も高くな

(10)

り、モノは安い。100円ショップもそこらへんにいっぱいあるし、ユニクロのように安い洋服もあって、昔のように古着をつぎはぎして着る必要はなく、ボンと捨てたりもできるわけです。これが、途上国型の貧困とは違って、モノはバンバン消費できるけれども、土地とか人材とかが一部の人しか使えない、あるいはそこに入り込めないという状況になっていますので、これまでとは違った対応が必要かなと思っています。

「問い」を持てるか否か

ここまでのお話は前置きで、ここから今日一番伝えたい大事なお話をします。それは、「問い」を持てるのか否かということです。決して皆さんに「問い」を持つべきですよという上から偉そうに指導をするお話ではありません。そうではなく、「問い」を持てる人間が、勝てる人間にもなる、社会もそれを求めてきている、そういう厳しさもあるということをいくつか事例を挙げながらお話していきたいと思います。

例えば、高校における「探究学習」は以前から始まっていましたが、昨年度、ちょうど皆さんが高校を出て大学に入ってくる頃から、「探究学習」が高校で必修化しました。学校の現場によってかなり差がありますが、上手くやっている学校だと、大学と一緒に組んで高校1年生から研究をやって大学の研究者とともに論文を書いて発表をするというかなり高度なことをやっている学校もあります。一方で、現場の先生方はただでさえ忙しいのに、何やっというかわからなくて社会科見学っぽいことをやったり、インターネットで調べさせたりして終わっているところもあります。

探究の時間は、私の世代は一から説明しないとダメなので、大学の研究者同士だと何それと言われちゃいます。保護者向けに話すこともありますが、教科科目の枠を越えて主体的・実践的に学ぶべしということを文科省が中等教育に向けてかなり強く推進しているのがこの「探究学習」です。この能力があることが入試の総合型選抜にも直結するように徐々にできてきています。

大学入試は、旧センター試験のようないわゆる筆記試験の一般入試で、一発で入る人もいれば、AO入試とか学校からの推薦とかで入る人もいます。筆記試験ではない方を総合型選抜とざっくり言いますが、ここで問われているのは内発的動機なんです。文科省も内発的動機を問おうとしています。いろんなデータを大学側も今調査をしています、大学進学後の成績も総合型選抜、AO入試などで入った方が良いということを、例えば早稲田大学や東京大学、これは20年以上大学入試に総合型選抜を入れてきた、かなり長いデータの蓄積がある大学が言っています。つまり高校時代のうちに研究っぽいこと、言い換えれば、問いを持って生きてきたのかということを大学に入る段階で問われた人の方が、その後の大学での成績も良いし就職率も良い、そして、その問いを持つ生き方は社会に出てからも生きると認識されるようになってきたのです。

またちょっと視点を変えます。社会学って何なのかという話をちょっとしたいと思います。いろいろな切り口がある話ですので、一言では言えないけれども、例えば、私が学んできた学問上の師匠の2人を通してお話ししますと、一人が上野千鶴子という人です。今、ジェンダー問題などで著名な方なのでお名前を聞いたことがあるかもしれません。直近だと、皆さんもLGBTQの話題がありましたね。今に始まったことではない。その前から、フェミニズム、女性がちゃんと社会で活躍できるようにしようという思潮がありますが、それを1980年代からずっと言ってきたのが上野千鶴子という人です。

もう一人、吉見俊哉という社会学者も私が教えを受けた先生ですけれども、この人は都市研究をやっています。さっき新宿の話をしました、皆さんせっかく東京に出てきていますので、八王子だけじゃなくぜひいろんな街を見に行ってください。街には、その社会、その当時のいろいろな本質というか、いろいろな要素というか、最先端のものが集積して象徴的に見えてきます。そこにはポジティブな最先端もあればネガティブな最先端もあるし、あるいは変化していく、これから大きく変化していくぞというその先端部分

(12)

というのも見えてきたりもします。そういうことをやってきたのがこの吉見俊哉の都市社会学です。そういったところから学びつつ、私はまた全然別な災害関係の研究もやっているし、一方で、現代社会のフィールドワークみたいな話は、この2人がやってきたことにも直接的に通じているかなと思っていますのですが、ここから具体的な話に入ってまいります。

20年の外部環境の変化

うちの大学院生、かなりグローバル化が進んでいて、昨日もゼミをやったんですけども、8割方中国人で、フランス人、日本人2人だけけれども2人も留学経験があって中国語が堪能です。昨日はそんなメンバー構成でした。留学生と一緒にやっている調査なんですけれども高田馬場という街がありません。皆さんはどんな風景をイメージするでしょうか。そもそも高田馬場を全く知らない人には早稲田大学があるところぐらいの説明しかできない。この高田馬場には、山手線沿線の大きな駅とは違う特異性が今見られるという話をします。これを私と同世代とか年配の人に言うと、高田馬場というと学生の街で、結構予備校がありました。早稲田予備校があったり、資格試験予備校も結構あったりしました。後は、夜行くと学生が飲み会をしていてそこらへんで寝ているというイメージだったり、そういうところでお金を使っちゃう学生向けに学生ローンの店がいっぱいあったりとか、そういう風景なんです。ある面では学生とかそれに近い世代の若者の街というイメージがあったし、これから社会に出ていく人たちのエネルギーがそこにありましたというのが元々の風景です。そして、今どうなっているのか。ぜひ行ってください。早稲田の改札出たすぐのところにビールの看板があるのは分かるけれども、それ以外は全部中国語になっています。駅の構内に入ると、その看板もだいたい中国語で、これは何かというと、中国人の留学生が日本の大学院に入るということをメインにした塾、予備校です。中国の大学を出た人が日本の大学院に入るという動きが非常に加速していて、その予備校がこの高

田馬場に集積している。さらには、よく見ると大学の学部にも入る、中国の高校を出てそのまま来日して日本の大学に入ることを奨めるサービスをやる塾が教育として始めているという風景です。横を見ると水商売系の看板があったり、奥はスマホゲームの看板があったりします。一応、皆さんの世代が消費するものにはそういうものもあるかもしれない。けれども、それ以上に看板というのは、そういう看板が出せる、つまり、既にお金がそこに回っている、いろんな人がそこにお金を払っているという事実を示していたり、あるいはこれから盛り上げていくぞと力を入れているものが街の看板になっているわけです。なので、看板を見るだけで、そこに時代の最先端が見えてきたりします。

20年の大学・社会の変化

何が起きているか、皆さんがこれからどう生きていくかという現代社会論的な話をします。今の大学の入学者数は60万人強です。70万人には届きません。大学は800校ほどあります。今の20歳前後の出生数は年間120～130万くらいですから、大学進学率はだいたい50%強です。では、昨年度のくらい子供が生まれたかという、77万人です。20年間で半分とは言わずとも、大幅に減っているわけです。さらに、今の0歳児と皆さんの間に20年差があり、そこから私にまた20年差があります。団塊ジュニアの世代だと年間200万人いたけれども、私の世代はこの200万人と120万人のちょうど間くらいにいます。ものすごい勢いで減っているわけです。

大学業界の人間として言うと、創価大学は大丈夫だとは思いますが、あと20年で少なくとも既存大学の3分の1は人や予算が消えます。これは会社もそうです。普通に今の規模を維持できなくなる。少なくとも日本国内のマーケット市場向けに日本国内の従業員でやっていくという会社は3分の1くらい人とか予算が消えるわけです。消えるというのは、経営難でつぶれるとか、合併して合理化するとか、良い悪いは別にして消えます。他方で、私立中学

(14)

校は全国に約800校あって、そのうちの約190校が東京に集積していて、1学年8万人くらいいます。私立に行けるといえるのは、ある程度お金もなければならぬし、親の意識も高くなければなりません。格差はどんどん広がっていきます。

先ほどの中国人が日本の大学院に入るための予備校の学生がSNSで会話していた家計簿をもらいました。一人で生活するのに1ヶ月40万円をかけていて、それが全額親からの仕送りだという人も少なくないということです。それについて中国脅威論を言うつもりもないし、日本衰退論を言うつもりもないけれども、事実として40万円仕送りをもらえるような家庭環境の人が日本にきているということです。バイトを全くしない人も少なくない。中国人留学生は日本語学校に1年間で90万円かかる、塾に半年で約40万円をかける、生活費を毎月約20万円かけるということなので、計算したら結構なことになります。要するに日本が割安になってきているということです。中国だけでなく、もっと他の新興国や東南アジアなどから見ても、日本はすごく割安だし、逆に日本から海外に行くのは非常に割高になっているというのも事実です。そういうなかで、中国の方からの目線でも日本でもそうですけど、子供が減ってDXがどんどん進むと何が起こっていくかということ、教育投資こそ未来への最大のリスクヘッジだ、未来が不確かななかで教育に賭けようということで親御さんたちは頑張るし、社会もそういったところを推進しようとする。一方で、中国はみんな幸せかということ、若者の失業率は20%を超えていて、日本で修士号を取ると中国で失業を避けられるからということで、このお金を払っていたりもするんですね。なので、豊かで余裕があるから、遊んで生きているわけではなくて、必死に生き残ろうとして日本で生活して苦労をしていたりもします。

社会が求める「知」というのが変わってきていて、そのなかでどう対応するかということの一つの例が「探究学習」で、要は「もっと現場に出る」という話です。20年前だったら、就職人気ランキングにマスコミや電通が出ていましたが、今はどんどん変わってきていますね。JTBもかつては人気でした

が、今はFIT化しています。これはForeign Independent Tourの略で、外国に自分個人でツアーをしちゃうというものです。学生はともかく会社の出張とかならもうみんな自分でインターネットで予約して勝手に動いてしまうというようになってきているのです。いずれにせよ、何かそういう大きなところに有名企業も変わっていて、社会に求められる「知」というのも変わってきています。

都市部の中高一貫校がますます強くなって受験でどうにかなるレベルではなくなってきました。「文化資本」という教養のレベルの差、「社会関係資本」という人脈のレベルの差、そういった差がどんどんついてきて、そういうなかで大学が求めるものが社会への適応力の高さと直結してきているのです。

ここまでいろいろ言ってきましたが、単純にそれが良いとか悪いとかいう話をしているわけでもなく、どういうふうにもこの問題を捉えながら、そのなかで良い人間の在り方とは何なのかということも考えていかななくてはならないのではないかとということを皆さんにお伝えしたい。

そういうなかで、学生の「中間集団」も生まれにくくなっている。大学もお酒を飲まないし、コミュニケーションの場も昔ほど密ではなく、ある意味でドライにクールになってきている。キャンパスも非常に綺麗だけれども、あまり人と人が混ざらなくなっていて、コロナを経てコミュニケーションもオンラインにどんどん代替されていって楽だけれどもインフォーマルなコミュニケーションとかコミュニティが生まれにくくなっているのです。

ここで「暗黙知」という言葉があります。例えば、こういうことをしたら人に対して無礼だよとか、何か人と会合をする時はこういうふう全体を統括して仕切るとトラブルが起こらないよとか、ぐちゃぐちゃの混沌のなかから学ぶものを学ぶ場がどんどんなくなっている。スマートすぎるし、もめなさすぎる。ゆえに何かトラブルが起こった時に対応できないとか、細かい部分でスキルを持っている人と持っていない人の差や、生まれ育った環境で良い育ちをしているかどうかの差がそのまま生きてしまうんですね。大学だと、

(16)

学生側では就職活動はますます青田買いで、どんどん早い時期から就職しましょうとか、「ガクチカ」(=学生の時に力を入れたもの)とかが重視されますから、教員側もいろいろ大変になってきています。

いま／これからの社会～VUCAの時代

今度は自分から問いを持つメリットとか、どうやって問いを持てるようになるのかということをお話ししていきます。

マスメディアは頻繁に「今の社会はVUCA(ブーカ)の時代ですよ」ということを言っています。皆さんも聞き覚えがあるかもしれないし、初めて聞いた人も覚えておいて損はない言葉です。これからの社会はいろいろ変わっていくし、不確定だし、複雑だし、曖昧であるということの英語の頭文字をとってVUCAと言うのです。

Volatility = 変動性

Uncertainty = 不確実性

Complexity = 複雑性

Ambiguity = 曖昧性

昔だっていつ戦争が起こるか分からない状態に日本が置かれたこともあったし、今より貧しかったり病気があったりした時代もありました。これからはそういう時代ではないけれども、それでも不確定だし先が見えない状況になっているということです。

ここでどういうふう生きるべきなのか、人間がどうあるべきなのかというところで、「問いを持続ける」ことが非常に重要だということです。問いを持続けないと変化が辛いですが、問いを持続けられると変化は楽しいし、何ならなりたい自分になっていける、そのためには問いが重要だという話をしたいと思います。

私は災害系の研究をしていますので、一つ事例を出したいと思います。東日本大震災の時に4700万㎡の災害廃棄物が出ました。学校教育のなかで災害に接する接点は非常に限られていて、防災訓練ぐらいですよ。地震が起きましたので机の下に潜ってください、じゃあ校庭に集まりましょうと言って、そこに消火器を使う訓練が入ったりする。そうした訓練も大事ですが、災害は地震だけじゃなくいろいろな災害があります。この八王子だって土砂崩れや水害が起こるかもしれない。あらゆる災害に共通して問題になるのは、災害廃棄物をどう処分するのかという話です。人が生きる、死ぬ、の話ではないけれども、社会で非常にゴミの問題というのは合意が取りにくいのです。

東日本大震災の時も4700万㎡、想像もできない多い量だと思うかもしれませんが、本来被災地内部で処理すべきものだったのを、全国的に遠いところ、北九州とかまで東北のものを持って行って燃やしたりしました。それによって、本来であれば普通にやっていたら十年以上かかる災害廃棄物の処理が数年のうちに終わったんですね。それは、言ってみれば東北が田舎だったからどうにかなった話ですが、今後、首都直下型地震や南海トラフ地震が起こったとします。その時に、災害廃棄物はこの東日本大震災の数倍は生まれます。皆さんは普段気にしていないかもしれませんが、都市・都会の廃棄物の処分というのは普通にゴミ箱に捨てるだけでも、常にかなり精緻な計算のもとでゴミを処理しています。これが一気に廃棄物が増えると社会が回らなくなります。これは実際に被災地でも起きたことですが、学校や、公園、役所の前とかが、全部一回ゴミの置き場になるんです。その状態で半年とか一年が経過します。東日本大震災の時は、さっき言ったように全国で処理したから半年とか一年で済んだけれども、首都圏ならそれが5年～10年続くような状況も十分にあり得るわけです。そうすると、公共空間、例えば学校が使えないとかという状況もあり得る。そういうことが想定される廃棄物の量が東日本大震災の数倍～5倍ぐらいなんです。

富士山が噴火した時にどれだけ灰が出るのかという議論では、17億㎡の灰が出ると言われています。これも災害廃棄物ですね、これは適当に計算した

のではなくて、江戸時代の宝永噴火(1707年)の時に実際に出たとされる量から計算しています。富士山が噴火するというのは、どのくらいの頻度だと思ってしまうでしょうか。歴史的に数万年規模で言うと、大体平均して30年に1回噴火をしています。あれ? でも聞いたことがないぞ? と思うかもしれませんが。確かに間が空くときがあるんですね。ちょうど今、間が空いていて、直近の富士山の大噴火がこの宝永噴火なんです。その時にどういうことが起こったのか、あるいは今の社会環境のなかで富士山が噴火したらどうなるのかということです。30年に1回噴火する富士山が300年黙っている。今後も300年黙る可能性は、あるかもしれないけれども低いわけですね。いつ噴火してもおかしくない、という言い方のほうが正しい。そして、その時にどのくらい被害が出るのかというと、新宿で1.5センチの灰が積もるだろうというふうに言われています。これはNHKでもニュースにしているので、調べていただくと出てきます。新宿で1.5センチということは、富士山からその間にある、ここ八王子なども、1.5センチどころではなく数センチ普通に積もるでしょう。そして除灰はどうでしょうか。除雪なら雪は暖かくなったら溶けて勝手に消えていくけれども、灰は消えません。火山灰って鉄とかガラスとか石灰とかいろいろ含んでいますから、雨が降ったら石灰が石膏みたいに固まったり、そして通電してショートしたりしますので、新幹線や高速道路も使えなくなります。そして、電線の上にも灰が積もってトラブルが起きて長期的に停電が続くことがあり得ると想定されています。

でも、そういうリスクを全部想定し始めると、とても考えきれない。いつ起こるか分からないものに予算をつけるわけにもいかないの、とりあえずその時の灰をどこかに持っていかなくはダメだということだけは議論されているのです。

長くなりましたが、VUCAの時代というのは、災害にしてもコロナにしても誰も予想しないことを想定しつつ、今ここで私たちがどういう問いを持てるのか。先ほどの話で言えば、灰がここら辺に数センチ積もったらどういう問題が起こるのか、もしかしたら何か利用できる話もあるのかもしれないし、

あるいは、新宿で1.5センチならもっと東京の東側に何か街の文化の拠点を作るというのかもしれないとかいろいろ考えられるわけです。問いが立っていくわけです。

なぜ大学生が研究するのかということをごひ考えていただきたい。皆さんは、文系も理系もいますけれども、卒業論文を書かされるらしいとか、理系だと卒業研究があって実験をやらされるわけですね。これはいくつかの答えはあるんですが、その一つをご紹介します。

問いを追究する最たるものが研究なのですが、研究って何でしょうか。白衣着て試験管持っている「鉄腕アトム」のお茶の水博士みたいな人がいますね。一方で、「となりのトトロ」に出てくるサツキとメイのお父さん、あの人は考古学者ですね。「となりのトトロ」の最初のシーンは本をたくさん積んだ車で走って行きますが、ああやって本をいっぱい読んで論文を書くということをお父さんはやっている。学習、勉強と研究は違います。そのことを一応意識していただいた上で、じゃあ大学って何をやるのということです。研究者だけでなくみんなで学生も研究しようということになっています。でも、おかしくないですか。大学生は研究者になるわけでもないのに、普通に銀行や新聞社に入りたいと思っている皆さんがなんで研究っぽいことをやるのかということにちょっとは疑問に思ったことがあるんじゃないでしょうか。別に金融機関に行きたいなら金融の勉強をしたいし、実際に資格を取ってみるという人もいるかもしれません。自分で研究してみること何のメリットがあるのかということですね。研究しなくても死なないですよ、卒論や実験もなくても死なない。だったら別に専門学校でもいいんじゃないかという葛藤も持ちつつ、親に大学に行きなさいと言われて来たという人もいるかもしれません。

大学で研究する理由、いろんな説がありますけれども、その一つがフンボルトというドイツの人が、フンボルト理念といわれることを言っています。19世紀初頭、まだ日本は江戸時代ですが、ヨーロッパでは産業革命が急速に社会を変えていました。このフンボルトが教育と研究を一体化すべしと

いうことを言ったのが日本にも紹介されて共感を呼び、日本でもフンボルト理念的な大学のあり方が作られていったと言われています。何で研究をするのかというと、どんな場でも役立つ知識がそこにあるからだ、ということ。フンボルトは言ったわけです。それを身につければ、状況が急速に変化する。例えば、産業革命で言えば皆さんは蒸気機関を思い浮かべるかもしれませんが。それまでならヨーロッパの人はパンを食べます。パンを食べるために小麦を粉にしてそこからパンを作っていく作業をするわけですが、小麦を粉にするって普通に考えて結構大変ですよ。カチカチの小麦を自分ですり鉢でやってみてください。とんでもないエネルギーと時間がかかる。臼を使いますが、臼をぐるぐる回すのも大変です。それで、牛とか馬とかにぐるぐる臼の周りを歩かせてその臼を挽かせたり、水車を使う方法もあったわけですが、それが一変しました。蒸気機関を使って膨大なエネルギーを作って小麦粉を作れるようになると大量生産ができる。大量消費もできる。これまで簡単にパンが手に入らなかった人にも手に入るようになっていく。それが産業革命です。今の話で、たぶん臼職人とかも大型の機械になって仕事を失ったかもしれないし、馬とか牛を飼って商売していた人もいなくなるわけですね。あるいは、そういう小さなところで自給自足的に小麦作って臼やってという人たちの生活スタイルも変わっていくなかで、別な商売が、いろんな配送とかをする人とかも生まれてくる。こういう話をすると、今AIで人間が仕事を奪われそうだという話を思い起こす人もいるかもしれませんが、これまで必要だったとされる仕事がどんどん要らなくなっていく。一番分かりやすく言うと、社会が急速に変化していくというのはそういうことです。それが、19世紀初頭の段階でもすでに問題になっていたわけです。そうすると、それによって臼の挽き方の職人さんのような人が仕事を失っていった時に、人材を育成する、人が学ぶ、教育をしていくということの質が根本的に変わらなくてはだめで、何か特定の仕事だけがするような教育では、社会の変化に対応できないよねということなんです。

というところで、この答えに戻ってきます。どんな場でも役立つ知識とい

うのがあるんだと。それが何なのかというと、自分の、あるいは誰もが手に負えない問題に向き合う能力なんだということなんです。今の白のたとえていくと、小麦を挽くということについての専門的な知識、それはそれで大事だけれども、それはたぶん手に負える、すぐ解ける問題なんです。そして、誰かが答えを出しているのだから、白が詰まった時にそれを変えていける。けれども、これからの社会というのは、この19世紀初頭、どんどん手に負えない問題が出てくる。その時にそこにどう向き合っていくのか、それが研究なんです。

まとめていきます。研究というのは、勉強する、つまり既に答えはこう出せますよという数学のドリルを解くようなものではなくて、答えがない問いというのが私たちの目の前にある。そこにどう向き合っていくのかというのが研究なんです。研究は、個別・具体的、特殊な領域に向けられていきます。つまり、教科学習のように、国語、算数、英語と分かれた教科別の話ではありません。私と同世代のある知り合いの方は、創価大学出身ですが編集者だけれども情報工学的なことをやっている。プログラミングとか細かいことをやりつつも、そこに見えない、答えがすぐには出ないような問いがあって、彼は今編集者をやっているわけです。政治的なことや文化的なこともやっていて、そこにある問いというのは個別・具体的なんだけれども、その答えが見つからない、それに向き合うと世界中誰も見つけていない問いに向き合えるようになっていくんです。その問いの解明に学問的、社会的に意義のある問いをちゃんと見つけて、それを解決していこうというのが研究の能力です。そして、それがVUCAの時代にとって非常に重要だから、大学では学生の皆さんと一緒に研究をやりましょうとなっているわけです。そして、それが高大連携といって、高校のうちから大学と一緒に研究しようというふうになってきているし、アクティブ・ラーニングが重要だとか、STEAM教育とか理系の研究っぽいことをみんなでやろうという動きもどんどん若年齢化しています。皆さんそういう世代だと思いますが、生きている限り問いを見つけて研究してそのなかからどういうふうに進んでいくのかということは非常に重要です。

リカレント・リスキリングの時代

ここ数年、リカレント・リスキリングという言葉が非常によく聞くようになりました。皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんの世代だと、80年代までは50歳定年が、一部ですけれど残っていました。サザエさんの波平さんって、50歳ちょっととかですよ。相当なおじいちゃんに見えるけれども、今だったら普通に若者風の格好をして歩いていても全然おかしくないのが波平さんの世代です。定年が50歳だった時代というのも、そう遠い昔ではなかったわけですね。70～80年代から60歳定年もいっぱいありましたけれども、そこから今どうなっているかという、65歳定年にしたり、50代半ばで一回定年したことにして、そこから70歳までお給料は安いけれども働いてくださいといったことが起こっています。50歳まで働く世代、少なくとも本気で50歳まで走れと言われる世代だったら、0歳から20歳まで生きて、20歳前後で一回、研究スキル的なものを含めて勉強して、そこから残りの30年走りましょ、さらにあと20～30年生きるけれどもそこは余生でいいですよ、会社が守ってくれますよという世代でした。しかし今はそうではなく、どうやら普通に70歳まで働いた方がよくなっているし、皆さんが70歳になる頃には80歳まで普通に働くという話になっているかもしれない。そう考えると、20歳から50歳までではなくて、20歳から80歳まで働く世代ということは、30年プラス30年で働く時間が倍になっていきます。そうなると、一回途中地点の50歳ぐらいで、あるいは人によってはもうちょっと早めの30代半ばぐらいから40代半ばぐらいまでに、リカレント・リスキリングをやることになります。リカレントというのはぐるぐる回るというイメージの言葉です。リスキリングというのはスキルをもう一回つけるという言葉です。もう一回学んだ方がいいのではないか。特に、こういう研究能力のような何か一つの問いに向き合う、誰も解いていない問いに向き合う、そのなかでこれから変化していった時に、これ困ったねというところに対処していく能力をつけた方がいいという社会が変わってきています。何度も繰り返し言っていますが、良い

悪いではなくて、事実として社会がそういうふうに変わってきているなかで、皆さん今20歳前後で学んでいるけれども、20年くらい経った時にもう一回学ばないとダメだという社会に変わっているかもしれません。少なくともそういうふうにしていった人がより生きやすい社会にはなっていると思います。そこからの中間集団の話とか、先ほどの擬似包摂社会の話にもつなげていきます。こういう学び合いをする時に大事なのは、大学もそうですね、ゼミとかもまさに中間集団的なものですが、私も昨日ゼミをしてきたという話をしましたが、私自身も学ぶし、中国人留学生が知っていることって私は全く知らないですからね。でも、逆にこちらから教えることもある。そういうふう定期的に集まって、お互いに知識を交換し合う、いろいろな生活上の困ったことも情報交換しあって実際に助け合うような場というのを、大学以外のいろいろなところでもう一度保っていく、そういうところに所属していくということは重要です。そのなかで、包摂と排除、排除が見えにくくなっているなかで起こっていく問題にも対応していくべきなのかなと思います。

今日はあまり被災地そのものの話は具体的にはしませんでした。少し補足します。被災地は一つの学ぶ場でもあります。私自身も、8月～9月の夏休みの3分の2くらい、被災地へ行きました。だいぶ復興が進んでいますが、まだいろいろな課題がある。課題があるということは、そこにさまざまな問いがある学びの宝庫なわけですね。

例えば、この地域のニュータウンが高齢化していてお年寄りの移動手段がない、買い物に行くのも大変といった問題です。極端に表面化している部分に向き合うからこそ見えてくる問題、あるいは答えなき問いに向き合う姿勢みたいなものもあります。意外とそういうものを見る人って少ないんですね。こういう問題はひょっとしたら皆さんの足元の八王子にもあるかもしれない。あるいは、いろいろ若者同士で悩みがある友達がいたら激励するという活動をしている人もいますね。その悩みを聞くなかで、個人の問題の先に、出自や家庭環境によって格差が出ているという問題もあるかもしれないし、コミュニケーション能力がないことから来るトラブルがあるかもしれない。で

(24)

も、そのことに対応するなかでより普遍的な、その友人の先にもっと困っている人がいて、そういう人を助けられるような解決策が眠っているかもしれません。ぜひそういうもの、ネガティブに見えるもの、答えがなさそうに見えるものに向き合うことに価値があるということ、そして、決して困っている人の前で言う言葉ではありませんが、ある面でそういう問いがいっぱいあることを楽しんでいただけたらと思います。これからの社会はそれをもっと求めていくようになっていくんだと思います。まとまりのない話な部分もありましたけれども、これで今日のお話を終わりたいと思います。